

2010年12月10日

やや長すぎる巻頭言

## 静かに去って行かれたお三方に共通するもの

—「精神保健福祉」に関わる方々に知っておいて欲しいこと—

全国精神保健福祉連絡協議会

会長 吉川 武彦

はじめに

私たちメンタルヘルス関係者にとって大切な大切な林 宗義先生が亡くなられた。わが国のメンタルヘルス関係者の多くは林先生と何らかの接点をもつ。かつて東大で学ばれた先生は、その頃の研究者なかまをおもちであるし、台湾でのご活躍もあり、さらにはWHOでお世話になった方もいよう。遅れてはカナダにお住まいであったし、そのお宅に招かれた方もたくさんいる。

日本語が堪能であったと言うだけでなく、先生が私たちを引きつけてやまないものをおもちだったから皆さんが「林詣で」をされた。その林先生を失ったと聞いたとき、私は「大人の後ろ姿や秋の風」という句をつくり先生に捧げた。先生はまさに「大人（たいじん・ターレン）」にふさわしい方であった。

### 1. 私たちの国にも「大人」と呼びたい方がいる、いえ、いた

この数年間に、私たちの国はメンタルヘルスに深く関わってこられた3人の「大人」を失った。ここでは後段に述べるような理由からメンタルヘルスを「精神衛生」と言うことにするが、長いこと「精神衛生」とは何かを考えてきたものとして、お三方を失ったその悲しみは深い。

その3人とは、失った順に言えば元国立精神・神経センター精神保健研究所所長であり元東京医科大学教授であられた加藤正明先生であり、元金沢大学教授、元東京大学教授、そして元国立武蔵療養所所長であり元東京都立松沢病院院長である秋元波留夫先生であり、そして元聖路加病院医長、元東京大学教授、そしてICU、国際基督教大学教授から国立精神衛生研究所所長になられた土居健郎先生である。お若い方々はご存じないかと思ひ先生方の輝かしいご経歴の一端として先生方の肩書きをお示ししたが、ご存じの方にとっては煩わしいかも知れない。

このお三方は、こうした公的な役職とはべつに私たちメンタルヘルス関係者にとっては多くの業績を残されている。その先生方のあまり知られていない業績については後に述べることとするが、加藤正明先生が1958年の第1回世界デイケア会議にご出席になり、精神障害者のリハビリテーションと地域生活支援の具体的手法としてのデイケアに感動され、帰国後直ちに国立国府台病院においてデイケアを試行されたことはあまり知られていない。

秋元波留夫先生は脳の電気生理学者としてその嚆矢を務めた方であるが、その先生が東京大学を退かれたあとはこうした学者としての道とはまったく異なる方向をたどられた。

秋元先生の失行や失認の研究に触発され、この道を辿ったひとりに吉田哲雄君がいる。彼は私の中学・高校のクラスメイトであるが、同じ精神科医の道を歩きながらも早世した。では秋元先生は脳性理学や脳病理学から離れて、ポスト東大教授では何をされたのであろうか。それを私が語るよりもいまその衣鉢を継ぐ方々がたくさんいる。彼が支えてこられたのは、精神障害者の地域生活支援のために細々と始められた作業所運動であり、声を大にして厚生労働省に訴えられた。

内科医として出発されたとうかがう土居健郎先生は、「白い巨塔」をきらい、大学における研究とはまったく異なった道を歩まれた。フロイトがそうであるように、こころが身体に及ぼすさまざまな影響を考えられてのことであろう精神分析学の道に入れ、その道の大家となられた。大学紛争、なかでも激しかった東大闘争のなかでも最も先鋭的であった東大精神科を立て直すために土居先生は請われて東大教授になられた。保健学科の精神衛生学教室の教授になられたばかりかまさに火中の栗を拾う医学科の精神医学教室の教授を兼務されるという、それまでの土居先生の生き方とはまるで異なった生活になったと思われる道を歩まれた。

このお三方の先生に「精神衛生」のなにが、どこが、どのように共通しているのかを探るのがこの小論の目的である。

## 2. 私論に重ね合わせて考えるお三方の業績

私はかねてより精神衛生には、「ポジティブ・メンタルヘルス」、「サポーターティブ・メンタルヘルス」、「トータル・メンタルヘルス」という3つの側面があると言ってきた。それは「精神衛生」の実践面である精神衛生活動の3側面と言い換えてもいい。ポジティブ・メンタルヘルスは個々の人のこころの健やかさを如何に保ちそれを高めるかであり、サポーターティブ・メンタルヘルスはこころの健やかさを失いかけた方々を如何に支えるかである。トータル・メンタルヘルスは人々が住む地域全体のこころの健康を考えることである。

秋元波留夫先生は、誰もがご存じのように若くして失行や失認に関する名著を残されたがこれは先生が脳病理にもとづいて精神医学を極めようとされた現れであり、それに続いて脳波を手がかりに脳生理学から精神医学に迫られた。そらがまさに学者としての秋元先生である。しかしながら先にも触れたように東大をやめられてからの秋元先生は大きく変貌された。

脳の生理学や脳の病理学を柱として精神障害や精神障害の周辺問題に迫ることから精神障害者の支えとなることも道であろうが、精神障害者の地域生活支援に関わることで彼らの支えになろうとされたことは、まさに精神衛生における「サポーターティブ・メンタルヘルス」の道を選ばれたとあっていい。いまほど法体系も整備されていなかったときにその道に入られたのは、まさに茨の道を選択されたといってもいい。それだけにときには激しい言動で厚生官僚を罵倒し叱咤激励された。

加藤正明先生は東京商大で学ばれたことからわかるように、社会経済の道を歩まれるはずであった。時代との出会いもあって学生運動をしたため大学を追われる羽目になったという。その間のことはたびたび個人的にお聞きしたが、いつもこの話の最後は「こういうぼくを拾ってくれたのが東京医大だったから、ぼくはどうしてのその恩返しをしなけれ

ばならないんだよ」と結ばれた。当時でいえば「赤い学生」だったであろう加藤先生を受け入れた東京医大の懐の深さが忍ばれる。それだけに東京医大への思い入れは大きかったようである。

こういう背景があったからであろう、臨床医になられてからも常に精神障害の問題を社会的な視点で捉えておられた。こころに関わる問題を病理性にとらわれずに考えて提示された「疾病性と事例性」という論理を提供されたのである。つまり、精神疾患のみならずこころの健康に赤信号がともると言うことは、国や地域との関わりの問題であり個人の問題とは言えないということをしきりに言われた。これはまさに精神衛生の「トータル・メンタルヘルス」の道を突き進まれたとっていいであろう。だからこそ世界とコミットし、わが国の精神衛生行政とコミットしながら常に先を見て私たちを導かれた。

これらの謂いに従えば「ポジティブ・メンタルヘルス」の道をまっしぐらに進まれたのが土居先生といえよう。土居健郎先生は、これまた精神科医としてでなく「甘えの構造」に代表されるように比較文化論者としてのご功績が大であることは言うまでもない。しかしながらここでは精神衛生という道から考えたい。先生は「察する」という言葉を用いて人間の関係を明らかにし、こころの健やかさを失うことは、この「察する」力を弱めるとお考えのようであった。

日本人論としてこの「察する」文化を論じられたところもあるが、後述するように「日本精神衛生学会」と深く関わりを持っていただいた関係から、先生の警咳に接することが多かった私は、こころの健やかさと先生の言われる「察する」と言うこととの関係についてたびたび伺うことができた。それを強引にまとめると、察する力を高めることがこころをより健やかにすることにつながると言うことになろうか。つまり、先生は精神衛生の3つの側面のうちの「ポジティブ・メンタルヘルス」の道をまっしぐらに歩かれたと私は見てきた。

### 3. 3先生との出会い

ここでは勝手にお許しを得て、お三方の先生との出会いに触れておきたい。

加藤正明先生との出会いが最も古い。それはまだ私が駆け出しの精神科医の頃のことである。当時の習慣というか制度というか、教授命令で私は群馬県の山奥の精神科病院にいた。この病院は創立5年ほどで精神病院ブームにあやかろうと土建屋が建てた病院であった。こう述べるといかにも酷い病院のように聞こえるであろうが、当時とすればこうした設立のいきさつが当たり前のことであり、とくに悪徳病院というわけではない。すばらしかったのはこうしたどさくさに建てられた病院にしてはカルテ管理がしっかりしていたことで、すべての入院患者のカルテが倉庫にしまわれていた。

夜な夜なその倉庫を漁り、自殺した患者さんの記録を調べはじめこれを当時の「病院精神医学会」の北海道大会で発表した。それが契機となり、この病院に入院した患者の自殺をその後も追い、精神障害者といえども自殺を決断する過程では一般の人と変わらず、家庭問題や病気を苦にして悩み苦しみながら自殺に赴くことを見いだした。こうした「自殺論」をある雑誌に投稿したとき、その雑誌の査読者が加藤正明先生であった。

この論文は査読者である加藤先生の「自殺論」、やや生物学的な偏りのある自殺論を批判して書いた。この論文を査読した加藤先生は「私にも新しく書いたものがあります」と

いうメモをつけて一部の書き換えを命じてこられた。先生とのつながりはここに始まった。1965年頃のことである。このあと、私が長野県の県立駒ヶ根病院に赴任しているときに「精研」つまり当時の国立精神衛生研究所に来ないかと誘ってくださった。その使者に立ったのが目黒克巳さんで後の厚生省局長である。こうして私は精研入りをし、始まっていたデイケア研究に携わるのだが、加藤先生に命じられるまま厚生省を兼務することとなり、世間的にはまさに厚生官僚として働く5年間を経験した。

この駆け出しの厚生官僚のときに出会ったのが秋元波留夫先生である。そのとき秋元先生はすでに東大教授を退かれ国立武蔵療養所の所長に就任されていた。所長室は、かつて関根所長時代に訪れたこともある所長室と変わらず古色蒼然とした木造の2階にあった。厚生省精神衛生課の課長から命じられ、霞ヶ関から小平の武蔵療養所を訪ね、型どおりに所長室のドアをノックした。そのとたん「誰だね」と大きな声が出たので、私は「厚生省から参りました吉川です」と答えると、所長である秋元先生は「厚生省から来たやつなんかと会う気はない」という返事。なにやらご機嫌は斜め、どうしたものかと思いながらそれでも「課長から言われて、所長のご意見を聞くように言われてきました」とこれまた大声で返事をした。

出会いがこれだからそのあとは散々で、いくらかのやりとりはあったものの私も負けじと「失礼にも程がある」と怒鳴ったので、まるで怒鳴り合いとなり私はそのまま所長室を飛び出した。こうして霞ヶ関の厚生省に戻って部屋にはいると課長以下は総立ちで「秋元先生になにを言ってきたんだ」と詰問される始末。経過を話すとうまく課長もわかってくれたが、どうも私が所長室を出るやいなや課長に電話が入ったようで、「あいつは、何というやつだ。失礼にも程がある」などなど散々怒鳴られたようであった。

これで秋元先生との関係が終わったのであれば、ここまでお話しをする必要はない。その後も所用で所長室にうかがうことがたびたびあったが「吉川君」と名前を呼んでもらうこととなり、その後、私が沖縄に赴任してからは数ヶ月に1回沖縄においてになり、私の家内と一緒にゴルフに興じてくださるという関係になった。

さて土居健郎先生だが、土居先生は加藤正明先生の後任として国立精神衛生研究所の所長に就任された。1983年のことである。この年、私は琉球大学を辞して東京都の保健所に勤務することになり、古巣である国立精研の所長室に土居先生をお訪ねした。そのときの情景はいまなお鮮明である。学会会場などでお顔を拝見したことはあっても言葉を掛けていただいたことは一度もない。ぎごちなく自己紹介から始めようとしたら、「ああ、あなたが吉川さん」とおっしゃるではないか。ちょっとびっくりして人違いをされているのではないかと疑ったが、その言葉に続いて「厚生省においてでしたね」と申された。

「はあ」と問の抜けた返事をしながら、「じつは」と切り出し、沖縄にいたこと、教育学部で仕事をしてきたことなどをお話しし、書物を通して土居先生から学んだことなどを話し始めると、照れながら手を振って「それはないですよ」など気さくに話をされた。そこで私は千葉大学で野沢栄司先生から精神分析の手ほどきを得たこと、さらに野沢先生から命じられて小此木啓吾先生のご指導を得るために慶応大学に通い詰めたこと、そして日本精神分析学会に入り土居先生のお姿を遠くから拝見していたこと、さらに琉球大学に行ったことから西園昌久先生の薫陶を受ける機会が多かったことなどをお話すると、土居先生はびっくりされて「そうですか、厚生省の方だとばかり思っていました」といいなが

ら、私が教育学部の教師をしていた関係で沖縄の教育についてお話しをすると、じつに興味深そうにお聞き下さった。

#### 4. 3先生に叱られたこと、励まされたこと、学んだこと

沖縄から戻ってもなく、私は「精神衛生」を「学としてとらえ」る「学会」をつくろうと考えた。そのとき私は東京都の保健所の職員で、東京都狛江市を足場に地域活動を始めた。何人かの仲間に声を掛けなんとか学会創設にこぎ着けることができたが、それを支援してくださったのは加藤正明先生であった。加藤先生はそのときストレス学会を創設することを計画しており、「わかった。では、精神衛生学会の方は君がやれよ。ぼくはストレス学会の方をやるからね」と言われ、学会創設のノウハウについてはいろいろと助言してくださった。「精神衛生」を「学」にするのだったら精研を巻き込まなければだめだと言ってくださったのはやはり加藤正明先生だった。もちろん私もそのつもりであったので、精研の現役やOBに次々声を掛けていった。

何回かの設立準備会をもち、第1回目の大会開催にこぎ着けることができたが、第1回大会は私が転じた先の東京都立中部総合精神保健福祉センターの体育館兼講堂を無料でお借りした。資金ゼロで始めた学会は、当日の参加料が基本財産になった。その全額を懐に入れながら会場を飛び歩いていたのを思い出す。懇親会は松沢病院の食堂をお借りし、酒類はすべて持ち寄り、乾き物での懇親会だった。それでも学会参加者が300人を超えたので3000円の会費、つまり100万円が私の懐にあった。とにかく手づくりの学会というのが本当のところ、とても「学」には届かないが、「主婦も参加できる学会にしよう」という意気込みだけはいまでも持ち続けている。

この日本精神衛生学会設立に「ケチ」をつけたのはそのとき財団法人日本精神衛生会の理事長であった秋元波留夫先生である。真っ向から「反対」するまでもない小さな動きだったからであろう、「100年からの伝統がある日本精神衛生会があるのに、いま、なぜ、そんなものが必要なかね」とまさに「ケチ」をつけられた。そういわれてしまえばそれまでだが、日本精神衛生会は高くそびえるエベレストのようなものであり、これから私たちがつくろうとするのは里山で、庶民が参加できる、主婦も参加できる「学会」をめざしているのです、それをご理解いただくようにした。

その学会に土居健郎先生が会長として参加してくださることになったときは宙に浮くほどの喜びであった。とはいえ、私たちが集まってつくった群小学会に土居先生が会長として座ってくださるということは確かに喜びでもあったが不安でもあった。学会活動のなかみについては誇りをもって正道を歩いていると思っはいるものの、その一方で最初の熱気は冷えつつあり、学会運営をどうしなければならぬかに頭を悩ましていたところであったからである。その不安は間もなく的中し、土居先生からの幾度となく電話でもお便りでもお叱りが飛んできた。

あるとき日本ストレス学会の理事長を務めておられた加藤正明先生からご連絡があり、日本精神衛生学会の伸び悩みを見るに見かねたか「日本ストレス学会と一緒にしようか」と言ってこられたことがある。そのとき「それはすべきではありません」と最も厳しく反論されたのは土居先生であった。もちろんそのときは加藤先生からの救助のサインであったと私は思ったが、土居先生は断固として「“精神衛生”を守らなければいけません」と

言われた。これぞポジティブ・メンタルヘルスの道をまっすぐに歩いてこられた土居健郎先生ならではの言葉である。

## 5. おわりに

わが国のメンタルヘルスに深く関わってこられた「大人」のお三方は去られた。

私は、かねがね歴史は語らなければならないものと考えている。わが国のメンタルヘルスに関わる事柄も多様であり多方面にわたるが、そのいずれに関しても語れる人が語らなければ埋もれてしまうばかりか、互いの関係すらもわからなくなってしまう。お一人おひとりをご存じの方々は多いであろうこのお三方についても、メンタルヘルスにかかる私論に引きつけて申し上げれば、ポジティブ・メンタルヘルスにかかる論理を提供して下さったのは土居健郎先生であり、サポーターティブ・メンタルヘルスを支えて下さったのは秋元波留夫先生であり、トータル・メンタルヘルスの道を開いて下さったのは加藤正明先生である。

このようなつながりをお三方に見出すことができたことは、それなりのおつきあいをさせていただいた私の役得であったかもしれないが、それを自分の胸の内にしめておくだけではもったいないように思っ、こうした小論を書くことにした。すでに、このお三方はこの世を去られ悠々自適の生活をしておられることと思うが、残された私たちは、三人の先生方が残された数々の業績を偲ぶばかりでなく、それらを縦横に織り上げて、土居先生流に言えば「精神衛生」、現代的に言えば「精神保健福祉」という大きな織物にしなければならぬと私は考えている。

台湾の至宝であり世界の至宝であった「大人」林 宗義先生がこの世を去られたことをきっかけに、わが国の至宝であり世界の至宝であった「大人」である三人の先生方を結びつけ、全国精神保健福祉連絡協議会に関わる方々や広く精神保健福祉関係者に私たちはこの先生方が開かれた道をお示ししたかったのが、このやや長い巻頭言の目的であることを付言しておきたい。